

嘗て自分の想像が作り上げた老博士の風貌は、此の瞬間に殆んど残りなく毀されてしまつた。老年のことはもとより知つて居たが、それにしても殆んど二重ふたへに曲り込むだ腰には、かつてアルタイを踏破されたやうな様子は微塵も残らず、禿げ上つてあるべき頭には白髪ゆたかに靡き、無愛想に引き締つて居る筈の顔面には、どこやらに愛嬌と滑稽氣味とが漂ふて居る。たゞ錆のある強い調子の音聲と、がつしりした骨組みとは想像を裏切らなかつた。好くこそとの挨拶を聞くや聞かぬに、「どんな材料を持つて來た、直ぐ見せて貰いたい」との性急な請求は、少からず自分をまごつかせた。そゝくさと靴の蓋を開けるのを、椅子からのめり出して窺き込むやうにせられた様子は、今思ひ出しても可笑しさを禁じ難い。最初に取り出した回鶻文の佛典の寫眞と自分のそれに對して施した音譯とを比較して讀み行かれる中に、急に鼻の先を自分の顔に觸れる迄に突き出して、先生は非常に視力が衰へて、二重に眼鏡を用ひて居られたが、尙見損つて机上の水壺を引つくり反したりされた。この語は何と解するなど聞かれる。いきなり試験をされて居る形である。こんな調子で夕食の時間迄は遂に分秒の休みもなかつたが、食後も更に同様の有様が繰り反された。暮れるに遅き此の地の八月の夜もいつしか更け、ひつそりとして音もない中に、若年の書生を對手に一心亂れず學術の研究に耽らるゝ老大家の尊とさ。然も世間は漸く開展して行く大戦に老幼を擧げて狂奔せる時である。其の日の日記に「此の世の人とも覺えず」と書いたのは、全く詐らざる感じである。

先生の夏居は老い茂つた松林の中に建てられた蕭洒な木造で、自分の室は階上の一隅に態々卓上電燈を取りつけなどして準備せられてあつた。その夜は種々の思ひに碌々眠りもせず。翌朝起き出で、松林を散歩して居ると、早くも先生は二重腰を杖に支へ、中折帽をおかした恰好に被つて大急ぎで自分を捜して來られる。近寄つて行くと、